



会報 JAMT

JAPANESE ASSOCIATION OF MEDICAL TECHNOLOGISTS

発行所

一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会

発行責任者 宮島喜文

編集責任者 深澤憲治

〒143-0016 東京都大田区大森北4丁目10番7号

TEL (03) 3768-4722 FAX (03) 3768-6722

ホームページ <https://www.jamt.or.jp>

P1～P2 様々な現場で活躍する臨床検査技師 (国際協力:トルコ・シリア大地震編)

P3 都道府県技師会 各地での取り組み (京都府編)

様々な現場で活躍する臨床検査技師(国際協力:トルコ・シリア大地震編)

2023年2月6日に発生したトルコ・シリア大地震では、2度の大きな地震がトルコ南東部・シリア北部を襲い、多くの方が犠牲となりました。住宅や公共インフラにも甚大な被害があり、現在も懸命な復興作業が続いています。

日本からも地震発生直後の2月10日から国際緊急援助隊(JDR)が順次派遣され、テント型野外病院を設営、現地の医療機関と連携して、外来診療、各種検査、夜間診療、手術、入院などの医療活動が行われました。その後、国際緊急援助隊・医療チームは3月中旬に活動を終了し帰国しています。

今回は、発生直後にJICA国際緊急援助隊・医療チームの一員としてトルコに派遣された臨床検査技師の体験談をご紹介します。

JICA国際緊急援助隊・医療チーム トルコへ

～ 新人婆隊員初派遣記 ～

臨床検査技師 渡部 典子

=== 派遣への思い ===

60歳を過ぎて、初めての緊急援助隊海外派遣は私にとってとても感慨深いものでした。夢であり憧れであり、自分へのリベンジでもありました。

かつてTVで見たカンボジアやアフリカ難民のそこで何かしたい自分

ここ福島県で12年前の東日本大震災時、医療従事者であるのに何もできなかった自分

そんな思いを自分の胸の奥に小さく小さく抱えてきたのかもしれませんが。仕事・家庭・子育て(縛られていたけれどこれも自分のやりたかったこと)を経て、自分を縛るものがなくなってきた今、今だからこのトルコへつながったような気がします。

=== 野外検査室 ===

トルコ到着時、2月中旬と一番寒い時期であったのだろう。幸運なことに風も雨もなく、昼間は晴れて青く気持ちの良い空が広がる天気であった。しかし、やはり寒い。日が暮れると一気に冷え込んでくる。冷気が深々と我々を覆ってきた。

援助隊第一陣の責務は診療所開設である。大量の機材・物資を降ろし、テントを組み立て、機材開封して設置する…ここまでの力仕事は先発の佐藤技師が行ってくれた。

2日後に出発した私は機器を稼働させるところから

国際緊急援助隊(JDR)派遣までの

日本は、地震や台風などの自然災害が多いため、これまでに豊富な経験と技術的なノウハウを蓄積してきました。こうした経験を途上国の災害救援に活かしたいとの思いから、1970年代後半に医療チームの派遣を中心とする国際緊急援助活動が始まりました。

1987年には「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」(通称JDR法)が施行。1992年の同法改正も踏まえ、救助チーム、医療チーム、専門家チーム、自衛隊部隊の派遣が可能となりました。

※医療チーム

医療チームは、被災者の診療にあたりるとともに、必要に応じて疾病の感染予防や蔓延防止のための活動を行います。メンバーは個人の意志で登録している医師、看護師、薬剤師、医療調整員の中から選ばれるのに加え外務省の職員やJICAの業務調整員から編成されます。隊の構成は、被害状況や被災国のニーズに応じて、柔軟に対応できるよう体制を整えています。また、医療チームは国際緊急援助隊の中で最も歴史が長く、派遣回数も最多です。

独立行政法人 国際協力機構(JICA) ホームページより

始まる。いずれもほぼ初めて触れる機器達。そんな技師でもが使えるように先人技師達がいろいろ準備してくれていたが、寒さで動かない。ことごとくいずれの装置も動かない。

◇超音波検査のサーマルプリンターはプリント途中で止まる。

◇血算装置は“too cold”と止まる。

◇生化学は“コウガクゲイン not ready”と止まる。

◇血液ガスは“Error60シュウイオンドガヒクスギマス”と止まる。

◇簡易キットは時間になってもコントロールラインすら出てこない。

医師や看護師と違って、検査技師は機器がなければ「ただの人」。自分がここにいる意味がなくなってしまふかもしれない大きな危機感を持って、佐藤技師とひたすら稼働へ向けて模索の繰返しが始まった。



検査機を温める



「写真提供 JICA」

- ◇複数のホッカイロで装置の回りを温め、緩衝材と銀の保温シートで覆い、更に段ボールを被せる。
- ◇装置を暗色の収納ボックスに入れて、日光浴。
- ◇簡易キット検査はホッカイロの上で。
- ◇テントとテントの隙間から冷気が入り込まぬようテントの境目にシートを被せる。

隊員個人の滞在期間は基本2週間である。

検査結果が皆順調にできるようになり、寒さも日に日に和らいでいった。滞在後半、昼間は日本からの出発時に隊員に配布された青い防寒ジャンパーを脱ぐほどになっていた。検査テントの中は更に暖かくなってきた…暑いくらい…暑い、気が付くとテント内の温度は30度を超えていた。“too cold”と動かなかった装置は“too hot”とメッセージを替えて又止まってしまった。

==== 生理検査 ====

生理検査の装置は、心電図1台とモバイルを含めた3種類4台の超音波装置である。

支援する病院は休校中の職業訓練校を仮設病院としていた。その一部屋一隅を借りてテント診療が開始前から診療は始まっていた。そこで心電図を取ったとき、心電計がまだ日本時刻のままであることに気付いていなかったし、ここトルコでの心電図の重要さをまだ認識していなかった。

外来診療サイトが整い、2月17日午後1時、我らJDR派遣隊のOguzeli Field Hospital (OFH) が開院と決めた。我らがOFHの開院とあって隊全体が緊張感をもってその時を待っていたが、救急車のサイレンが緊張感を高くし、救急車の到着とともに開院した。

医師・救急救命士・看護師…救急要員集まってきた。検査からもどのような患者か何が必要か、超音波装置・心電図、採血か指示前に向いた。救急車から運び出された患者は心肺停止状態、にわかに蘇生が始まる。そして心電図、平坦な波形にしばしば大きくノイズが入る。トルコ人医師より何度も取り直しを指示されるが、なぜ取り直しといわれる理由がその時は理解できなかった。時刻修正と体毛で浮いてしまう電極対策、マニュアルモードに直して取り直す。

トルコでは、心電図のフラット波形の確認をもって死亡時刻がきまることをその時知った。



診療サイト設営前



診療サイト設営後



トルコの子供たちと

「写真提供 JICA」

超音波検査装置 3種類 ①一号機 ②モバイルにも使える充電式小型装置 ③モバイルに使い、コンベックス・セクタ・経膈までのプローブが揃い、画像を飛ばすことができる。急患のFAST、呼吸困難者の心臓、腹痛・腰痛・胸痛と超音波装置の出番は多い。妊娠確認から妊婦検診・出産間際まで婦人科では必需品である。

まだ5カ月の赤ちゃんを抱いたお母さんがまさかの妊娠反応陽性、エコーで子宮内に嚢胞、妊娠の確認ができたときは、思わず祝福・激励をしてしまった。検査は診療の過程の一部であり、患者と多く接するところではない。それ故医療の中でも検査をえらび、いまだに人との対応は得手としないが、感情の共有ができたときには心動くものである。

令和5年3月31日

都道府県技師会 各地での取り組み(京都府編)

全国47都道府県それぞれに臨床（衛生）検査技師会があります。各都道府県技師会では日臨技と連携した活動以外にも地元の医療関連団体や自治体、時には企業とも協力して地域に根差した独自の活動を行っています。今回は、京都府臨床検査技師会から京都府医学検査学会で企画されたガーナとの中継での特別講演について紹介いたします。

地方学会の新しい取り組み

～第3回京都医学検査学会 海外Web中継を経験して～

一般社団法人 京都府臨床検査技師会
理事 山田 雅

京都では毎年2月23日に京都医学検査学会を開催しています。本学会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大とともに始まり、昨年度で3回目の開催となりました。

昨年度の学会プログラムの特別講演を海外に滞在する先生と企画することになりました。滞在地はガーナ共和国で日本の時差は9時間ある離れた国になります。講演開始時間は日本時間で午後4時、ガーナ共和国では午前7時となり、早朝でしたが快く講演をお引き受けいただけました。企画を進めていくなかで気がかりなところはインターネットの通信状況でした。実際に開催数カ月前のWebミーティングでは町田先生と通信ができない状態が30分ほどありました。そのため先生には比較的通信環境の良い場所からの配信と、通信が不安定な場合に備えた音声入り講演資料データの準備をお願いしました。また、学会当日は講演開始数十分前に通信テストをしたうえで講演を開始し、冒頭と質疑以外はカメラをオフにして通信負担を減らすようにしました。講演中も身構えてましたが、最終的には大きな通信トラブルもなく無事終わることができました。講演内容も素晴らしく終了時には現地からだけでなく、オンライン上からもリアクションでの拍手喝采があり盛況でした。様々な問題はありましたが、遥か彼方の異国からの講演はオンライン利点を活かした企画となりました。

会報JAMTに掲載する都道府県技師会での取り組みや、検査技師の活動に関する原稿・情報を募集しています。ご投稿は当会事務局までメールでお寄せください。



第3回京都医学検査学会 特別講演

「非典型的な臨床検査技師キャリアパスの一例
～臨床から企業、国際協力分野へのアプローチ～」

町田 清正 先生(株式会社フジタプランニング)



国際協力を意識したきっかけ

- > JICA大阪「仏語圏アフリカ臨床検査技術」研修のお手伝い
- > 「臨床検査技師としてこんな関わり方があるんだ...!」
- > 「来年はもっと役に立ちたい」
- > 「今のスキルをもっと伸ばしたい」
- > 「え？事業仕分け？え？研修中止？」
- > 「...」



（編集後記）今号はJICA国際緊急援助隊外を通じて海外で活動する臨床検査技師の話題が取り上げられています。母国語のみで会話が成り立ち、快適な環境で仕事ができることのありがたさをひしひしと感じました。私には言葉の通じない海外での仕事はハードルが高いため、外国から来られ患者さんに安心して受診いただけるような心配りをすることが私の国際協力の第一歩です。言葉が通じなくても、感情の共有、心の繋がりはできますよね。

（桑原）